

Contents

- 02 目次
プロローグ VOL.1
- 04 **特集 道路**
未来へ続く道を作る
- 06 ふたたび動き出す
国と経済を結ぶ道作り ミャンマー
- 12 長く使える
道路造りを目指して ラオス
- 14 東南アジア 回廊構想
- 16 システムとデータが導く橋梁の安全
- 18 まだある! 道路をよくする多様な取り組み
- 22 特別授業 Lesson1 インフラギャップ
- 24 **JICA海外協力隊がゆく Vol. 1**
タンザニア
- 26 **ザ・研修① 日本の知見を世界へ**
JICA沖縄
- 28 **地球ギャラリー Vol. 122** ミクロネシア
写真・文●道城征央
ごみが、自然を、暮らしを、脅かす
- 34 **教えて! 外務省**
知っておきたい国際協力②
- 36 JICAイベントカレンダー
- 38 広報室から、プレゼントほか
- 39 JICA PRESS
- 40 **わたしが見つけたSDGs Vol. 2**



ミャンマー取材で訪れたドーボン橋にて。
写真：鈴木拓也

この10年余、私はアフリカ・ケニアに社会貢献活動の取材で足を運んでいるが、訪れるたびに町の変わり様に驚かされるばかりだ。中でも年々、進化を感じさせられるのが交通渋滞ならぬ交通停滞とでも言うか、環境汚染にもつながる交通事情である。

私は初めてケニアの地に降り立つ寸前まで、飛行機が着陸する滑走路を野生動物たちが遠目からうかがっているのではないかと、その姿を機内からウォッチできるのではないかと半ば楽しみにしていたが、まったく

の妄想にすぎなかった。だいたひ空港を出ると待っていたのは、彼らではなく車の「群れ」で、すぐに交通渋滞となつて襲つてきたのだから。「確か、ここは赤道直下のはずだが……」

アフリカにあるのはサバンナや砂漠だけではないのだ。特に、ケニアの首都ナイロビは中心部には高層ビルも林立している。そしてこの交通渋滞である。まるで東京をも彷彿とさせるが、ケニアが先進国の仲間入りをしたわけではない。渋滞の原因は年々増え続ける車の台数に道路の整備が追いつかないことにあるが、どうやら「ラウンドアバウト」と呼ばれる円形交差点も一役買っているようだった。

パリの凱旋門を中心に12本の道路が集まるシャルルドゴール広場のあの交差点を思い出してほしい。「ラウンドアバウト」には信号機も一時停止もなく、対向車線を横切つて曲がる必要もないので、本来、適切な交通量ならば十字交差点よりもスムーズな流れが期待できる。交差点に進入する際に不要な停止がない上に、加速減速の頻度が低いから排気ガスの排出量や車の燃料消費量も抑えられ、騒音も減少するはずだ。

ところが、ナイロビでは急激な交通量の増加のために車が交差点内

アフリカの道を 行き交う群れ

文・黒井克行

プロローグ
VOL.1

立ち往生し、渋滞の元凶となつていく。こうなると排気ガスも騒音も十分で、おそらく地球温暖化に貢献していることだろう。自家用車はまだごく一握りの市民に限られるものの、「マトトウ」という乗り合いバス、国内企業やアフリカへ進出を続ける外資系企業の社用車、インフラ整備の工事車両など、朝夕の通勤時は車で道路が埋まるのである。何より、東アフリカ最大の都市ナイロビへとつながる道には、多くの人と物資を載せた車が各地から押し寄せる。

その一方、電車などの公共交通が十分でないケニアでは歩いて通勤する人がめずらしくない。中心部に向かって延びる車道と並行して走る歩道はまだ土埃も舞う砂利道がほとんどだが、ネクタイ姿やワンピースをお洒落に着こなす勤め人が片道1時間くらいならば平気で会社まで歩いて行くのだ。車に乗っている自分も当然、その横を通り過ぎて行くはずだが、渋滞のために抜きつ抜かれつの牛歩だ。やがて中央分離帯や十字交差点の近くで待機している物売りにつかまる。車道もなんのそのとばかりに走る車をすり抜けながら路上を移動し、商品を小脇に抱えて売り歩くのは途上国でよく見かける光景だが、物売りの中には小さい子どもや赤ちゃんをおぶつた母親が車の窓

越しに声をかけてくることもある。生活のためにやむを得ないのだろうと情をのぞかせ応対すると、次から次へと別の売りが押し寄せてくるので治安上注意しなければならぬが、売っているモノを眺めていると実に興味深い。新聞、バナナやオレンジといった果物、ピーナッツなどのスナックなどは定番で、ケニア国旗、サングラス、帽子、なぜか「侍」とプリントされたTシャツやけん玉等、日用品やお土産の類いまでの品ぞろえだ。しかし、「安くしとくよ」と言われて、高級腕時計やブランド物のハンドバッグ(まがい)を出されて飛びつく人はいまい。それでも自信たっぷり目を見せつけて一所懸命な姿に、友人が1500ケニアシリング(約1600円)でロレックスに似せた腕時計を買っていた。同じ時を刻んだまま、その日のうちにびくともしなくなつたが。そういえば、2010年に南アフリカでサッカーW杯が開催された時のことだ。ヨハネスブルグの試合会場へ向かう車列で渋滞する中、同じように物売りが路上を移動しながら商売をしていたが、この時、爆発的に売れたのがブゼラだった。南アフリカの伝統的なサッカーの応援グッズで、「ブオーツ」という重低音をスタジアム中に鳴り響かせて話

題になったあの鳴り物だ。が、それ以上に路上で人気を博したのが耳栓だった。観戦中にブゼラの音に耐えかねたサポーターがその対策として「耳栓はないか?」と自ら車のウィンドウを下ろし物売りに必死になつて買い求めていたのだ。

ケニアをはじめアフリカ各地で開発が加速度的に進む今、同時にこうした交通渋滞も引き起こされ、開発とは直接的には無縁でもそれに寄生し、いまだ路上でたくましく生きる人たちがいる。私はケニアでの渋滞に際し、そんな彼らにメールを送るつもりでいつも今を刻む新聞を買わせてもらっている。

ところで、路上の物売りに気を取られているうちに私たちとデッドヒートをくり返していた徒歩の通勤者たちはおそらく、私たちを置き去りにして会社に着いたはずであろう。



イラスト●中村知史

黒井克行(くろいかつゆき)
1958年、北海道生まれ。早稲田大学卒業後、出版社勤務を経てノンフィクション作家に。おもな著書に、『高橋尚子 夢はきっとかなう』(学習研究社)、『テンカウント』(幻冬舎文庫)、『男の引き際』(新潮新書)、『日野原老人野球団』(幻冬舎)など。日本大学法学部非常勤講師も務める。